



次年度に向けて

令和6年産米は、前年ほどではなかったものの栽培期間をとおして平均気温が平年より高くなり、生育ステージや刈り取り適期が前進しました。令和7年以降も地球温暖化のため、高温や集中豪雨など極端な天候が予想されます。

これまでも各種高温対策を周知してきましたが、まずは土づくりを起点とした栽培環境の再整備や飽水管理の実施、適期作業の励行などこれまで以上に対策の確実な実施が求められます。基本技術を再確認し、不断の技術研鑽と環境整備に励みましょう。

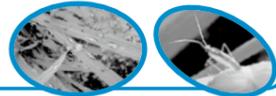
やっぱり基本は土づくり 豊作に近道無し、されど継続は力なり

養水分を吸収する部位は主に根です。異常気象に耐えながら登熟していくために根張りを優先する土づくりの重要性が増しています。「ケイ酸投入」と「根活」の2つのキーワードに取り組みましょう。

入れねば得られぬ「ケイ酸の効果」

異常気象に耐える
養水分転流維持
猛暑も冷夏も対応

ケイ酸の「鎧」を身にまとう
病害虫に強く
初穀を硬く「ふ割れ」防止
斑点米軽減



葉がシャキッと立ち
受光体勢向上
登熟アップ!

基肥投入目安

けい酸加里、シリカ未来 40kg/10a以上

珪カル、けい酸30 80kg/10a以上

当地はこれまで豊富な地力に頼りすぎていましたが、高温時代ではケイ酸不足が収量・品質に強く影響する時代になりました。ケイ酸資材のほか、有機物を投入し地力の維持向上を図って、持続可能な米産地を次世代に承継することを目指しましょう。

本数取らねば、勝だれねっす

近年は初期茎数が不足したため穂数不足となり減収してしまう事例が多くあります。やはり穂数を取らなければ補え切れません。



栽植密度と植え付け本数

疎植になるほど10a当りに植え込まれる本数は減り、天候等の影響が大きくなります。経営規模や目的にあわせて栽植密度や植え付け本数を再検討して、茎数の確保を目指します。

疎植より70株/坪が安定的

疎植なら5~6本/株程度

遅植え、冷水地帯は密植、70~80株/坪植え、速効性肥料の増施

施肥体系 活着肥と高温対策

初期茎数不足の原因は、軟弱苗、活着遅れ、異常還元による生育停滞などが挙げられます。まずは健苗育成と田植え後の活着肥も欠かせないポイントになります。

茎数が取れたらそれを実らせる体力も必要です。一発型肥料を使っていても、稲体と天気によっては減数分裂期以降の追肥の検討も必要です。

苗半作+素早い活着

猛暑でも実れる栄養を持たせる

“根”が活躍できる環境づくり

排水対策

雪解け停滞水があると土の中が酸欠になりやすい。フラ腐熟が進まず田植え後の異常還元につながる。サブソイラや明きょ施工で排水、透水を向上させる。

飽水管理

常時湛水ではなく一時的に田面を露出させながら土壌の湿潤状態を保つ水管理が「飽水管理」。土中に酸素も供給されやすく、地温上昇を防ぎ、根の活力減退を防ぐことができる。

プラス1cmの根域確保

稲の表層根は地表面温度の影響を受けやすいので、根を下層に深く張らせることができれば気温の影響が少ないうえ、足腰の強い稲となり倒伏にも強くなります。降雪で固く締まった作土を耕起でほぐして根を張りやすくさせますが、現在の耕深からもう1cm深く、耕深15cmを目標として、下はゴロゴロ、上はトロトロの耕起代かきを実施します。中干しも重要です。サブソイラ等施工で下層への亀裂拡大で酸化状態を維持することも有効です。

高温の影響は 虫 できない!

害虫(カメムシ類、ウンカ類)は気温が高くなると活動が活発になります。加えて管内では残草してしまっただけが散見されており、特に斑点米カメムシ類の発生、被害が多くなっています。薬剤防除だけでなく、耕種防除も組み合わせてカメムシの発生密度を低くしていく必要があります。

耕種防除

- ◆ケイカル等ケイ酸施用で、割れ初を少なくする。
- ◆農道・畦畔の草刈りを徹底しカメムシの住処をなくす。
- ◆飛来目印となるノピエ・ホタルイを残草させない。

薬剤防除

薬剤散布時期

①出穂10日後ころ+②1回目防除の14日後ころ
スタークル剤 キラップ剤、エクシード剤

- ①薬剤散布後、5日以内に農道畦畔を含めた草刈りを実施。
- ②ほ場内外に雑草が目立つ場合は、出穂期24日後頃に追加防除。ただし、薬剤耐性回避のため同じ薬剤での防除は避けます。
- ③防除時のドリフト(飛散)に注意し、防除直後の落水も避けず。

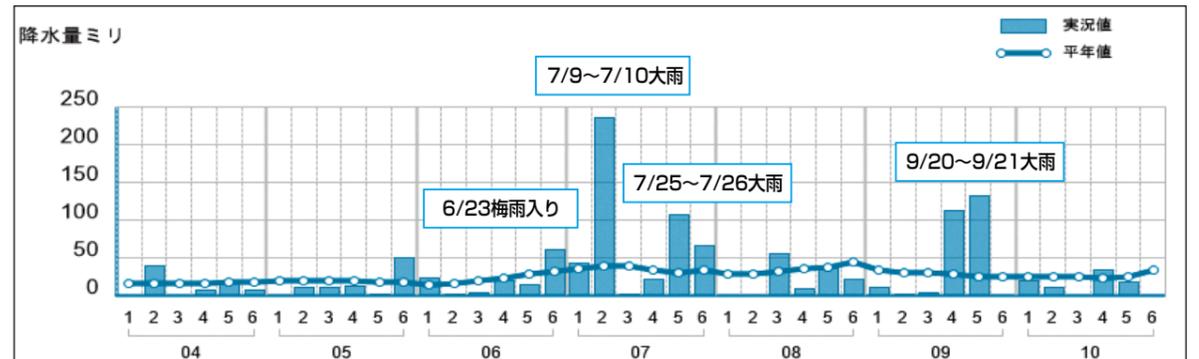
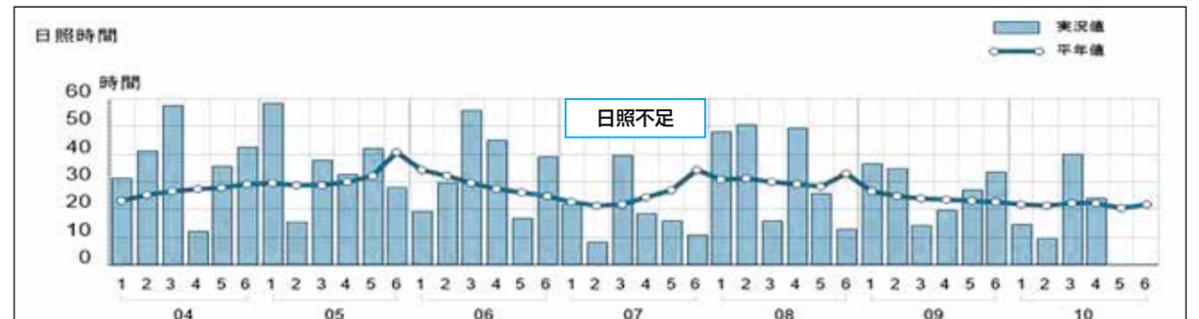
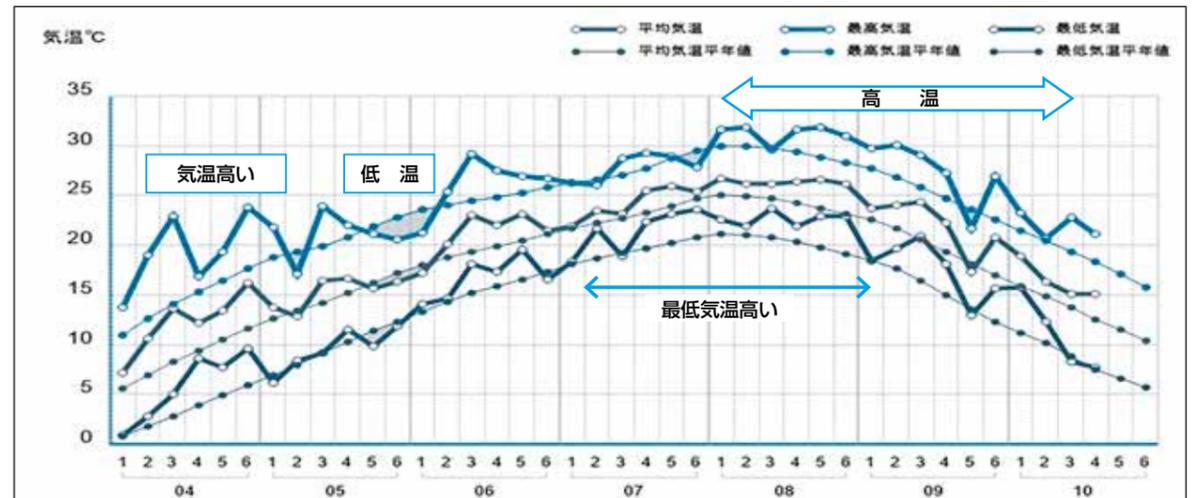
令和6年度 総括版

令和6年の稲作は、前年ほどの高温ではなく、高温登熟による品質低下は少なくなりました。しかし、各時期を振り返ると、育苗期間は高温、田植え期前後は低温、7月以降は数度の大雨と日照不足により草丈が長く倒伏ほ場が多く見られ、登熟に影響をおよぼしました。

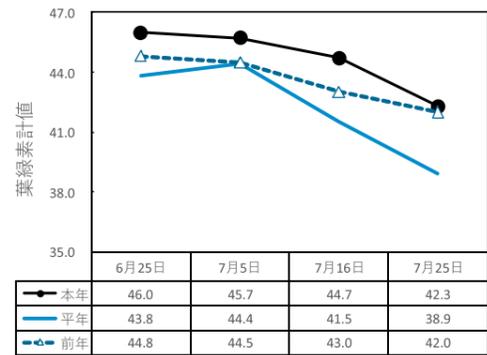
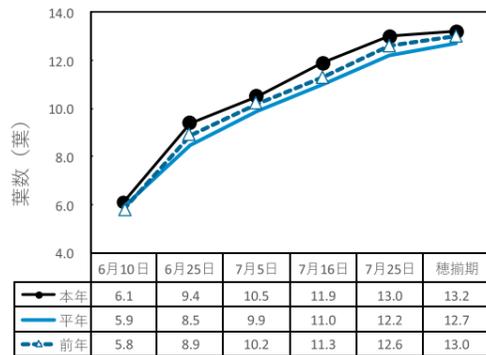
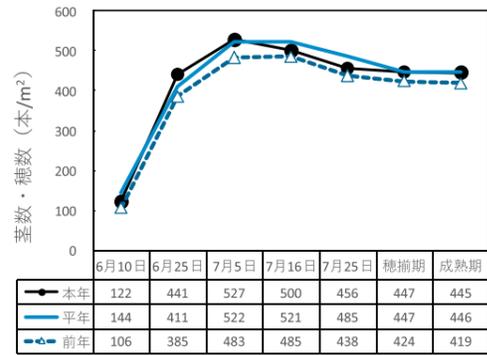
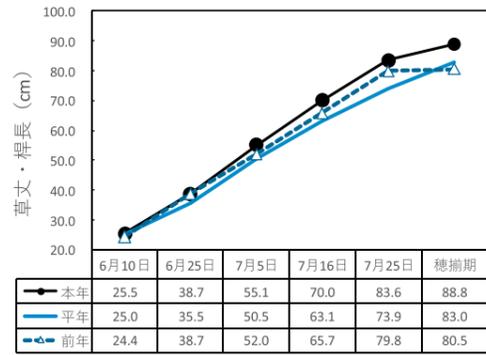
栽培技術の見直しや温暖化気象への対応など考えられるすべての対策を検討、実行していきましょう。

気象経過及び生育概況

令和6年4月~10月、半旬別、アメダスポイント大曲



生育概況（仙北地域振興局農業振興普及課調べ）



育苗期 ～土壌乾燥、高温多照～

4月は気温が高く経過し、降水量が少なかったことから土壌の乾燥が進み、耕起作業は順調に進みました。管内の播種作業（盛期）は4月24日（平年差早1日）でしたが、高温多照の影響により、出芽不良や苗焼け症状が発生したハウスが確認されました。また、4月の降水量が少なかったことや土壌の乾燥が進んだことなどから、代かき作業時の入水に時間を要したほ場が散見されました。

田植期～分けつ期 ～ほ場間差大きく、分けつやや少ない～

管内の田植え作業の盛期は5月25日（平年差遅2日）で、代かき作業の遅れが影響して終期も平年より遅くなりました。5月20日以降の田植えでは気温は平年を下回っており、活着までに時間を要したほ場が一部ありました。また、5月17日頃の強風によって一部ほ場では代枯れが確認されました。

6月25日の定点調査結果（あきたこまち、10地点平均）は、草丈は38.7cmで平年より長く（平年比109%）、茎数は441本/m²（平年比107%）、葉数は9.4葉（平年差+0.9葉）でいずれも平年より多く、葉色（SPAD値）は46.0で平年より濃く（平年差+2.2）になりました。6月3～4半旬に高温多照となったことから、停滞していた分けつの発生が促進されたことにより茎数が平年より多くなりましたが、田植え後の低温により生育停滞が見られたほ場では茎数増加が緩慢になるなど、茎数はほ場間差が大きくなりました。また、中干し期間に当たる6月6半旬～7月2半旬にかけて降水量が多くなり、中干し開始後は田面の乾燥は緩慢でした。

幼穂形成期～減数分裂期 ～大雨被害、日照不足と長稈化～

7月上旬の気温は高く、日照時間は少なくなりました。東北地方では6月23日に梅雨入りし、7月9日から10日にかけて前線や低気圧が東北地方を通過した影響により降水量がかなり多くなりました。7月16日の定点調査結果（あきたこまち、10地点平均）は、草丈は70.0cmで平年より長く（平年比111%）、茎数は500本/m²（平年比96%）でやや少なく、葉色（SPAD値）は44.7で平年より濃く（平年差+3.2）になりました。多くの地点で幼穂形成期を過ぎていたことから、この時期の生育栄養診断では草丈が長く、葉色が濃いことで、IV型やV-2型に分類される地点が多くなりました。そのため、追肥を控えたほ場が多かったと考えられました。また、7月2半旬の最低気温が高く、日照時間が少なく経過したことに加えて、葉数が多くなったことや葉色が濃かったことから、草丈は幼穂形成期～減数分裂期にかけて平年より長く推移しました。

出穂期～成熟期 ～登熟期は高温傾向、強雨により倒伏相次ぐ～

出穂期は8月1日で平年より1日早まり、出穂後の8月の気温は平年よりかなり高く、日照時間は平年並でした。本年は幼穂形成期頃の葉色は濃くなりましたが、7月24～26日にかけての大雨や7月下旬の日照不足の影響により、一穂粒数は平年並でした。前年の様な異常高温とはならなかったものの、出穂後は高温で経過したことで高温時に湛水できなかったほ場等では白未熟の発生につながりました。また、高温により登熟は順調に進み、成熟期が早まったことから刈取始期は9月14日（平年差早6日）、盛期は9月24日（同差早5日）で早まりました。本年は水稻の草丈が生育期間を通して長く推移した影響により、8月下旬以降に倒伏するほ場が例年より多くなりました。倒伏したほ場では青未熟による充実度不足や穂発芽などの品質低下が確認されています。

作柄概況

～県南地域の作況指数は「103」のやや良～

令和6年12月10日に東北農政局が公表した秋田県の令和6年産水稻の収穫量は582kg/10a（ふるい目幅1.70mm）で、作況指数は全県で「102」のやや良、県南地区は「103」のやや良でした。
※作況指数は農家等が使用しているふるい目幅ベースによる。ふるい目幅1.90mmの予想収量は全県で552kg/10a。

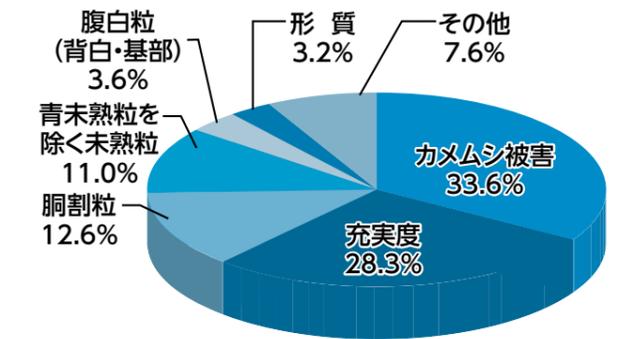
	玄米重 kg	穂 本/m ²	一穂粒数 粒/穂	m ² 当り 千粒/m ²	登熟歩合 %	千粒重 g
本年値	578	445	69.5	30.6	87.4	22.0
平年比・差	100%	100%	100%	100%	+3.1	96%
前年比・差	102%	106%	101%	107%	-3.0	99%

水稻定点調査ほ（あきたこまち10地点平均）における収量構成要素では、m²当たり穂数は445本、一穂粒数は69.5粒で平年並であり、m²当たり粒数は30.6千粒といずれも平年並でした。千粒重は22.0gとやや小さくなったものの、登熟歩合が87.4%と平年より約3ポイント高くなったことから、水稻定点調査ほにおける収量（ふるい目1.90mm）は578kg/10a（平年並となりました。千粒重は粒度が高い分布の割合が低くなったことから、平年より小さくなりました。

本年はm²当たり穂数は10地点平均で445本/m²の平年並となりましたが、調査地点別に見ると初期から茎数が確保できずに穂数不足となったほ場では、m²当たり粒数が30千粒/m²を下回ったことで収量の確保につながらなかったと考えられました。

また、本年は稈長が86.5cm（平年比106%）と長く、特に倒伏に関係する下位節間長（第4節より下）が平年より長く（平年比118%）、稈長や下位節間が長かった地点では倒伏程度が大きくなりました。調査地点ごとの収量では、倒伏程度が大きかったほ場では登熟歩合の低下により、平年よりも減収した地点が見られました。本年は前年のような高温被害は少なかったものの、倒伏による充実度不足やカメムシ被害が多くなっています。

本年の品質は良好で1等米比率は概ね平年並となっていますが、斑点米カメムシ類による着色粒による落等が目立っています。また、前年ほどではないものの出穂期以降の高温が影響したことで充実度不足や乳白粒などの白未熟粒が確認されています。



令和6年産米格付け理由比率

（JA秋田おぼこ、令和6年11月27日時点）

病害虫の発生状況

いもち病

BLASTAM（アメダスデータを用いた葉いもち発生予測プログラム）において、管内では7月上旬に感染好適日が出現したほか、7月いっぱいには曇雨天が続き、いもち病が発生しやすい気象となりました。ただ、適切な防除が実施されたため、穂いもちへの移行は少なくなりました。

紋枯病

本年は茎数がやや少なかったものの、梅雨明け以降の高温の影響で発病株の増加が見られました。前年発生したほ場を中心に増加傾向となっているため、警戒を強めていかなければなりません。

もみ枯細菌病

期間をとおして高温傾向となったことから、ハウス内温度が上がりやすい状況となりました。前年に続き、被害が多くなっています。

斑点米カメムシ類

7月17日に秋田県病害虫防除所から、斑点米カメムシ類に関する注意報が発表されています。本年は暖冬の影響から雪消えが早く、発生時期が早まり、発生量も多くなりました。出穂期10日後頃の適期防除に加え、出穂期24日後頃の追加防除も多くはほ場で実施されたものの、斑点米被害は多くなりました。